

紫式部とメヒティルト

香田 芳樹

二〇〇八年は紫式部の『源氏物語』の千年紀にあたることされる。古典に疎い筆者でも、谷崎の現代語訳を手にとったことはあり、千年を経て色褪せない平安人の感性には今さらながらに驚かされる。二〇〇八年はまた西欧文学にとっても記念すべき年である。女性文学の草分けとされる『神性の流れる光』（創文社刊）の作者マクデブルクのメヒティルト（Mechthild von Magdeburg 1208-1282）の生誕八〇〇年にあたるからである。式部に遅れること二〇〇年、ドイツでもようやく女性作家が産声をあげた。

しかし、同じ女流・女性作家といっても二人はタイプが大きく違う。社会的地位を見ても、式部が受領階級の出身で、時の権力者藤原道長の長女で一条天皇の後だった中宮彰子に仕えた女房なのに対し、メヒティルトはドイツ東部の大都市マクデブルクに生きたベギンと呼ばれる半俗の修道女だった。作風も、かたや美男子光源氏の

奔放な恋愛遍歴を描いた王朝絵巻と、かたや幻視の中で神との合一を体験する宗教的啓示文学といえ、その差は歴然としている。確かに通じるころはないかのようにみえる二人ではあるが、物書く「第二の性」として得た特殊な体験が彼女たちを結びつけている。物を書き本にするという今では当り前の行為が中世の女性たちにはまったく別のことを意味していたことが、二人の手記から読み取れるのだ。ともに祝賀年を迎えるのを機に、日独初の女性作家の誕生秘話を比較してみるのも悪くはないだろう。

憂さと病

紫式部が『源氏物語』を書く直接のきっかけは、「身の憂さ」であった。夫との死別後、季節の移ろいや身の回りの諸事万端にまつたく心が動かなくなるまで落ち込んだ彼女にとって、「行くすゑの

心ほそさ」を慰めるのはただ「はかなき物語」をしたため、それについて気心の知れた人々と話を交わすことだけだった。しかしそれを彼女から奪ったのが他ならぬ宮仕えだった。『紫式部日記』で彼女は言う、「自分がこの世に生きている値打ちのある者とは思いませんが、〔書くことで〕さしあたり恥ずかしいとか、辛いと身にしみて感じることはだけはまぬがれていたのに、〔宮仕えに出て〕こんなにも辛さ恥ずかしさを残らず味わいつくすとは何と哀れなわが身でしょう」。女房に嫉妬されたり、殿方に言い寄られたりと宮中は式部にとって気の安まる場所ではなかった。書くことを奪われた女房は憂さに煩悶する。

メヒティルトに書くことを強いたのも病である。彼女がたびたび重病に倒れたのは体が弱かったせいではない。一二歳で初めて靈感を受けて以来、毎日のように神は「挨拶」を送ってきたが、これが病となって彼女を襲ったのだ。人目を恐れて彼女は長らく啓示について何も語らなかつたが、ついに神秘体験を書き記す決心をする。「語らなければ神を畏れ、書けば今度は人の無理解が恐ろしい」（第三巻一）からである。多くの女性神秘家たちもこうした葛藤に苦しんでいる。有名なビンゲンのヒルデガルトも長らく自分の体験について口を閉ざしていたが、やはり重い病を患う。これが、神の声

を聞きながらもそれを語らないことへの「神の鞭」であると知り、修道女はようやく筆を執る。神が病となって女性たちに口を開かせるのは中世に限らず、宗教に一般的な現象である。シャーマンを襲う憑依と同じように、原始部族社会では女たちも祖先霊の預言や警告を病氣を通して聞きとることができた。それは宗教人類学者I・M・ルイスの言葉を借りれば、「追放された神々が女の口をかりて語る」言葉なのである。女性は病氣の力をかりて政治的な発言権を得たのだ。中世の神秘家は病める霊媒であつたが、神の言葉を取り次ぐにはもっと効率のよいメディアがあることに思いあたる。写本である。

色紙草紙と黄金写本

印刷術の発明は単なる技術革命ではなく、公刊のために書くという物書きのスタイルをも決定づけたが、作家が公表を意識し始めたのは印刷術によるのではない。もっと古くから流布目的で著述した人たちがいる。修道女である。現在も数多く残る『聖女伝』は自分や姉妹たちの生涯を記録して後世に残したいと考えたアマチュア作家たちの野心作である。これは、男性による文学作品の多くが貴族の依頼品であり、作者自身については何も語らないのとは対照的で

ある。強烈な自己顕示欲にかりたてられてメヒティルトも「自己の赤裸々な姿と秘密」(第一巻前書)を公にしたが、さらにそれが後代の人にも読まれるように、「私の死後もこの本を書き写してくれる写手の人たちに恵みを垂れてください」(第二巻二六)と神に願う。神は写本を黄金の文字で飾ると約束するが、それは本があくまで天国の装飾品であり、一個人のメモワールではないからである。この本には神のことしか書かれておらず何人も真理を火あぶりにすることはできない、と神自身に言わせる自信は大したものである。自己顕示欲と謙譲の美徳のせめぎ合いは出版の常なのかもしれない。

中宮が宮中に帰るのが近づいた寛弘五年(一〇〇八年)十一月、式部はそれまでばらばらだった『源氏物語』を一冊の本にまとめるよう仰せつかる。彼女は、この慌ただしい時期に、それも産後間もない彰子がそうした作業に熱を入れるのを訝しく思いつつ、本の色紙選びや写字生の手配や製本にかいがいしく働く。自作が本になって献上されることに、内心喜びを隠せないものである。しかしそうしたそぶりはちらとも見せないのが式部流。本を所望されたのは中宮様と道長様、その証拠に二人は私に上等な墨挟みや筆などを賜ったほどこすからと書き添えることも忘れない。『源氏物語』の成立に左大臣道長が関わったことは間違いないが、式部がそれをかえって

迷惑がってみせるのは、女だてらに出しゃばるまいと控えていたのに、殿が是非にと所望されたので仕方なく公開する羽目になってしまいました、と言いたいからなのであろう。それは道長が式部の留守中に部屋にこっそり忍びこんで『源氏』の原稿を探し出し、人目にさらしてしまったエピソードでさらに補強される。心ならずも推敲不足の原稿が出廻ってしまったことを悔やむ言葉の裏には、『源氏』の成功を鼻にかけていると思われたくない女流作家の心理がかいま見える。

漢籍とラテン語

女だてらに物を書くことに対する批判をかわすためにはヨーロッパの女性作家たちには男性聖職者のうしろだてが必要だった。メヒティルトにはドミニコ会士ハインリヒが、ヒルデガルトには聖ベルナルがいたし、二人の他にもエルスベート・シュターゲルにはハインリヒ・ゾイゼが、マルガレータ・エーブナーにはネルトリンゲンのハインリヒが後見人として執筆を監督し作品の正統性を保証した。それゆえ彼女たちは皆一様に自らの無能ぶりを強調する。ヒルデガルトはラテン語が読めないことを恥じ、メヒティルトは「無学な舌」が神の証人になることの重責を嘆く。実際は教養にあふれて

いた女たちに無学を装わせたのは男性による神学の独占形態であった。メヒティルトは教区聖職者からたびたび「書くのをやめないと本を焼き捨てるぞ」と脅されていたと告白している。

こうした状況は宮中でもかわりはなかった。紫式部が清少納言を嫌ったのは、彼女が「したり顔で賢(さか)しだつて」いるからである。彼女が漢学の才をひけらかすのがどうにも我慢ならない。こんな女だてらに「人に異ならむと思ひこのめる人」はろくな死に方はしないとまで酷評する。私なんて読めても読めないふりをしてるのにと。彼女は実は子供の頃から弟よりも漢籍に習熟し、父をして「女の子なのが口惜しい」と言わしめたほどなのであった。それゆえ彼女は一条帝に「この人は日本紀を読んでいるにちがいない」と言いあてられずいぶん狼狽している。そしてそれを聞いたある女房に「いみじうなむ才(さい)がる(ずいぶん学識がおありなこと)」と揶揄され「日本紀の御局」とあだ名されてしまう。才とは、式部にもメヒティルトにも恥も恐怖も自負心もかき立てる奇妙な代物なのであった。

いろ(こ)のみとエロス

本居宣長が『玉の小櫛』で、熊沢蕃山の源氏解釈を批判したこと

「美風」を再現するための「たはむれ」、すなわち方便に過ぎないとする儒学者蕃山の解釈を否定し、宣長は「もののあはれのふかきこと、恋にまさるはなき」がゆえに、好色は作品の本質であるとした。彼が、物語にいたずらに政治的メッセージを読みこもうとする儒者の手から源氏物語を救いだし、情感の手にゆだねたのは、もののあはれこそ「身をおさめ、家をも国をも治むべき道」と信じたからである。恋は大和心ばかりか経世の道にまで通じる普遍的な原理であり、源氏物語はその文学的体現なのであった。宣長の理解に式部が同意するかどうかはわからない。しかし光源氏のいろごのみは我々現代人が想像するよりもっと奥の深い恋心であったことは確かである。

奥深い日本語の「愛」と「恋」を現代西欧語で区別するのは難しいが、中高ドイツ語は愛とは別に、恋という語をもっていた。現代ドイツ語では「憧れ」と訳されるこの言葉は恋い焦がれることであると同時に、かなわぬ想いに懊悩することも意味していた。それゆえ中世ドイツ文学の珠玉『トリスタンとイゾルデ』(十三世紀)の序文で作者ゴットフリートは、かなわぬ恋を恋する人こそ高貴であると説いたのである。悲恋は恋の宿命であると。トリスタンとイゾルデはこの世の愛に胸を焦がしたが、メヒティルトが憧れたのは神

公序良俗に反したことは疑いない。紫式部も道長に、恋愛小説を書くくらいだからさぞかし「すぎもの」にちがいないとからかわれている。女性たちが描く恋愛模様は中世社会にとってさまざまな意味でスキャンダラスだったのだろう。

形見と薬草

であった。彼女は幻視の中で恋する魂となつて、白無垢に黄金のマントをはおつて神のもとへ急ぐ。森ではすでに婚礼の舞踏が始まつていて、若い王子にリードされて恋する魂は愛から幻視に、幻視から恍惚へと舞い上がっていく。眩惑の末に踊り疲れた魂は喉の渴きをおぼえるが、聖母マリアの乳も殉教者たちの血も物足りない。彼女はイエスと婚礼の葡萄酒を飲みたいのだ。恋する魂が神の秘密の小部屋に入っていくと、そこには愛のベッドがしつらえてあり、恋人が待っている。「服を脱ぎなさい。」そう命じられて、魂は裸になり恋人に身を任せる。「あなたは私の本性になり切つて、あなたと私の間に何もないくらいにならないければならない。」恋人はそう言つて魂を愛撫し、聖なる合一が達成される。メヒティルトが幻視の中で見た魂と神との婚礼は嚴肅であるが、修道女の書くものとは思えないほどエロチックでもある。それは彼女にはイエス・キリストは三位一体の神ではなく、生身の恋人としてしか想像できないからである。「本質を共にする」(genatret) 熱い抱擁は、自己の死でもある。神に抱きすくめられれば、魂は地上の生を死ななければならないのだから。修道女の魂は熱いエロスとタナトスの弁証法にのつて上昇していく。

過激な性描写(?) は女性神秘家には当り前でも、教会の掲げる

晩年メヒティルトは住み慣れたマクデブルクを離れ、ヘルフタにある女子修道院に引き取られる。重い病気に冒され、最後は失明していったらしい。彼女は病床の自分を神の花嫁と呼び、病を花嫁衣装とした。肉の痛みをまとうことで花婿イエスと受難の苦しみを共有したかったのだ。病床で彼女はまたこれ以上書かなければならないのかと神に問う。彼は薬袋を指さして薬草がまだたくさん残っているという。本で病人を治し健康な者を強めるのがお前の使命だというのである。彼女は書き続ける決心をする。「紫式部集」に残る式部最晩年の歌は物語作家の諦念と期待を歌っている。「たれか世にながらへてみむ 書きとめし 跡は消えせぬ 形見なれども」——諦めずによかった。あなたたちの形見と薬草は世にながらえてこうして私たちに届いたのだから。

(こうだ・よしき 慶應義塾大学文学部教授/ドイツ文学)